

# 和歌山市中心市街地活性化基本計画（改訂版）策定のための市民ワークショップ 第1回（6月2日）開催記録

和歌山市中心市街地活性化基本計画（改訂版）策定のための市民ワークショップが、6月2日（水）午後6時45分より、和歌山市役所14階大会議室において開催されました。

第1回目の今回は、公募した結果選ばれた市民メンバー24人への委嘱状の交付式、総括コーディネータの足立基浩様（和歌山大学経済学部助教授）による中心市街地活性化に関する講演、事務局から今後のワークショップの説明などを行いました。

## 1 委嘱状の交付

4月5日から5月14日まで募集し、決定した「和歌山市中心市街地活性化基本計画（改訂版）策定のための市民ワークショップ」市民メンバーに対し、委嘱状を交付しました。

決定した市民メンバーの皆様は以下のとおりです。



市民メンバー（24人）			
青木 彦藏	市谷 康一	鵜飼 俊行	太田 淳二
大松 美輪	川口 昌紀	川口 美智子	吉備 久芳
栗須 太器治	小林 一三	塩崎 朗浩	谷脇 ゆかり
土橋 進	徳田 直季	永井 択	西口 哲司
平畑 浩司	前島 徹	森 一世	森下 幸生
安岡 真由	山本 好男	和田 眞	和田 祐毅

## 2 助役あいさつ(概要)

和歌山市では、教育のパワーアップをはじめ7つのKを重点施策として取り組んでおるところですが、その中の一つに「活力ある元気な和歌山市の再建」というのがあり、そうすると避けて通れないのが中心市街地の活性化です。現在の中心市街地活性化基本計画は、策定から5年が経過し現状にそぐわない部分が出てきています。そこで今回、多くの候補者の中から選ばれました24名の皆様方に様々なご提案・ご意見をいただき、時代に即応した基本計画を策定していきたいと考えておりますのでご協力のほどよろしくお願いいたします。



また、総括コーディネータをお引き受けいただいた和大的の足立先生、ファシリテータの皆様方、協働スタッフの方々、これから長丁場となりますが、ご協力よろしくお願いいたします。

### 3 市民ワークショップ参加者の紹介

24人の「市民メンバー」、市民ワークショップの全体のまとめ役となる「総括コーディネータ」、グループ討議の進行・まとめ役である「ファシリテータ」、アドバイザー的役割の「ワーキング協働スタッフ」（市職員12人、県職員2人、TMO1人）の紹介を行いました。

総括コーディネータ、ファシリテータは次の方々です。

総括コーディネータ	
足立基浩	和歌山大学経済学部 助教授

ファシリテータ	
片桐裕明	NPO法人
川崎昌和	総研系コンサル
鳥淵朋子	地元コンサル
西川 昇	まちづくり系市民ネットワーク

### 4 足立基浩氏講演

テーマ『全国を中心市街地活性化～これからのまちづくり～』

総括コーディネータである足立助教授に中心市街地活性化について講演をしていただきました。

概要は以下のとおりです。

#### 1 全国の中心市街地活性化事例

和歌山市独自のまちづくりを考えるためにも、他の市町村の活性化事例がヒントになる。

長浜市はまちづくり会社黒壁が中心となりまちおこしを展開。10年前は年9万人ほどの観光客が、現在では約200万人になっている。日帰り客にターゲットを絞り、3～4時間歩いて楽しめる面白さが詰まっている。

横浜市大倉山駅西口商店街では、バラバラだったまちの人の意見をまとめるための方策のひとつとして、主婦を中心としたコンセンサス作りを行った。まちおこしの会議に主婦の方に参加してもらい、そこで決まったことについては、それぞれの家庭で話をし説得してもらおうというしくみ。妻に言われると夫は弱いということで、バラバラだったまちの意見が統一されていった。

湯布院町のまちづくりのキーワードになっていたのが、一人勝ちをさせないマーケティング。一つの目立ったホテルとか旅館をつかってそこに惹きつけるのではなく、みんながそれぞれ特色を出し全体として惹きつける。「みんなでつってみんなで目立とう」というのが、このまち全体の哲学となり、又このまちの精神的な支えになっている。



東北地方でもまちづくりが盛んである。例えば石森章太郎の萬画館をつくった石巻市、中心市街地への定住促進策を実施している福島県郡山市などその他いろいろ事例がある。

イギリスの商店街では、若者が中心市街地の商店街で働いている。比率が日本と全然違う。また、あちらの商店街には、シャッターがない。夜でもショーウインドウが見えるようになっている。店舗の新陳代謝がよく、店を閉めてもすぐに他の人が商売を始められる。

まちづくりには、若者がキーワードになるがなかなか積極的に関わっていない。これではいけないとすることで、日本の大学のうちいくつかは、若者に中心市街地に関心を持ってもらうためにいろんなことをしている。例えば山口大学では、中心市街地に部屋を借りてそこで「ベンチャービジネス論」等の講義を行っている。最初は市のレベルだったが、県の重点施策となり県と市が協働で大学とまちをつなげる企画をしている。和歌山大学でも、いくつかのゼミが、中心市街地をはじめいろいろなまちづくりに参加している。

## 2 中心市街地活性化が必要な理由

- ① 中心市街地は社会に対して様々な便益を与える。中心市街地は古くからあって、多くの歴史的建物があり、又形が変わってもそこに残る愛情や思い出のような無形資産もある。
- ② 新しい建物を建てるより、既存の建物を維持して利用した方が効率がいい。郊外にどんどん広げていくよりは、まちにあるものを集中的に利用再検討する方がはるかに合理的である。中心地というのはまちの顔であり、そこに行けば何かがある、そういう場所があるまちとないまちでは随分差がある。
- ③ まちには、「センチメンタルバリュー」が存在する。センチメンタルバリューとは、心の価値、ふるさとの価値、そこを大切に守っていききたいという価値である。中心市街地のセンチメンタルバリューは重要である。

## 3 活性化のパラダイム（考え方の基本的な枠組み）

- ① 「全体的なマーケティングの必要性」何が必要で何が足りないのか考える。
- ② 「資金の捻出」予算が何にどの程度必要なのか考える。
- ③ 「現状の組織の再構築」、TMO や市民、NPO、行政といった組織の連携。
- ④ 「土地の所有権」若い人が、中心市街地に店を出したいと思った場合。それを仲介するシステムの構築が必要である。例えば長野の商工会議所では、店を出したい若者と所有者との仲介を行っている。
- ⑤ 「シルバービジネスの可能性」高齢社会を迎えるにあたって、高齢者の方が入って来やすいシステムをどうやってつくっていくのか、ここがアイデアの絞りどころ。高齢者の夫婦が楽しくまちを歩いているのを見て、若い夫婦がいいなあと思ってまちを歩く。そんな雰囲気ができればいい。

## 4 ワークショップでの視点

何を (What), どこで (Where), 誰が (Who), いつ (When), なぜ (Why), どのように (How), という6つの視点で、まちづくりに取り組むのが重要。特になぜやるのか、誰がやるのかがポイントとなり、どのようにやるのかは最後でいい。

今回のワークショップでは、「個店の魅力で人を惹きつけるまち」、「お気に入りの風景スポットがあるまち」、「長い時間ゆっくり過ごせるまち」、「高齢になっても生き生きと過ごせるまち」の4つのテーマが考えられておりどれも非常に重要である。

また、アイデアを実行することが非常に大切である。そして実行させるのは皆さん自身。よく行政に頼るとか民間の企業に頼るとい話になるが、しかし結局は自分たちで自分たちのまちをどのようにし

たいのか、どのように実行するのかという意気込みが重要である。長浜などはそれが典型的に現れている。長浜は黒壁という民間会社を中心となってまちおこしを行っており、商店街以外の人がつくった会社である。しかし、商店街の人と話し合いをしながらまとめていき、自分たちでアイデアを出し、まちをプロデュースしている。そのための道筋や方策をつくるのが、今回のワークショップである。限られた予算の中で、逆にお金をかけず現実的にできることはないかというところが、今後のまちおこしのアイデアを絞り込んでいく上でおもしろいところでもある。

これからのまちづくりは、住民参加というか、皆さんが参加して、みんなに意見を言ってもらう時代。よくこういう事を言うと市議員がいる、行政がいる、なぜ市民参加なのかという話が出てくる。しかしそれでは行き詰まってしまっている、ダメだから皆さんの参加が必要となる。中心市街地活性化基本計画という5年10年の和歌山市の中心地に大きな影響を与える基本計画を皆さんと一緒に作り、昔みたいにハコものを造ってという事ではなく、これをやったらみんなの心が集まってくる、まちが元気になるようなそういったことをキーワードにしながら議論を重ねて、和歌山独自のパワーのあるものをつくっていければと思う。

## 5 次回の予定

第2回（6月16日予定）のワークショップでは、「現状と課題の把握ステージ」と題して、24人の市民メンバーに①個店の魅力で人を惹きつけるまち（賑わい性創出）、②お気に入りの風景やスポットのあるまち（界索性創出）、③長い時間ゆっくり過ごせるまち（回遊性・滞留性創出）、④高齢になっても生き生きと暮らせるまち（暮らし空間創出）の4つのグループに分かれて、それぞれの担当ファシリテータの元でグループ討議を行い、各テーマ毎に現状と課題を把握します。